

「森林の多面的機能」

解説シリーズ

第31回 森林の伝統文化機能

森林管理研究領域

香川 隆英

**森林と古来から付き合いしてきた日本人**

いにしえから日本人は森とともに暮らしてきました。米を主食とするようになってからは、森林は農業や人々の生活に欠かすことのできない資源として、深く日本人の生活と関わってきました。こうした森の存在というものは、日本人の精神構造に深く根付いており、人々の感性や自然観にも影響を与えてきました。

人々の森林に対する感性は、花見や紅葉狩りといった行楽的な楽しみ（アメニティ）であり、一方で神社・仏閣の社寺林・鎮守の森といった信仰に繋がるものでもあります。前者はサクラやモミジ・カエデの明るく華やかな、ハレの場であり、後者はスギや照葉樹林のやや暗く厳かな場であるといえます。そうした森の機能の特徴を古来から日本人は上手に使い分けて、日常生活のメリハリに上手く活用してきたといえましょう。

**伝統文化機能の保全**

森林の伝統文化機能を保全するための施策として、我が国では社寺林を風致林として保護してきました。古くは平安時代に桓武天皇が詔によって、社寺の風致林を禁伐にしています。したがって、平安時代における風致林は、人々の楽しみやアメニティのためにあるのではなく、どちらかといえば信仰のためにあり、それは森林の厳かさを体験するためであったといえましょう。

それが徐々に信仰の対象だけでなく、名所や旧跡などの風景の美しさやアメニティを得るための対象として風致林がとらえられてきたのです。

京都の嵐山などがその典型でしょう。風景を楽しむために、鎌倉時代からサクラやモミジを植えてきたのです。名所・旧跡の花見や紅葉狩りは当初は上流階級の遊びでしたが、時代を追うに連れ、そうした遊びが庶民にも浸透するようになってきました。江戸時代になると、嵐山のお花見は、庶民のものであったのです。そうして、その習慣が現在にも連綿と受け継がれてきたのです。

**これからの伝統文化機能**

ところで、森林観についてのドイツ人と日本人の比較研究によると、ドイツ人の都市生活の方が日本人のそれよりも、深い森や巨樹に対する畏敬の念が強いという結果が出ています。上で述べたような日本人と社寺林との関係、またその後のアメニティとしての付き合いの長さ・深さから思えば、やや意外な感じを受けます。それだけ、近代日本の都市生活者が信仰やアメニティの場としての森から、遠ざかった生活をしてきたということでしょうか。しかしながら、そうした都市生活の歴史は長い私たちの森との関わりからみれば、ほんの1ページにすぎません。すでに、鬱状態や自殺志願、登校拒否や生活習慣病の蔓延など、都市生活中心の社会への警笛が鳴らされています。私たちは、伝統文化機能としての森の荘厳さやハレのアメニティを日常生活に取り戻していくとともに、成熟した社会生活の中に森林の歴史・伝統に接する機会や、森を利用した芸術・文化に触れる機会をより増やしていく努力が必要なのだと思います。



神聖な気分になる、戸隠奥社の参道林